

2018年経済学史学会大会報告レジュメ

論題: アリストテレスのコイノニアからマルクスのインテルムンディアへ (From Aristotle's $\kappa\omicron\iota\nu\omega\nu\iota\alpha$ to Marx's *intermundia*)

報告者 神武庸四郎

I 序—問題の手がかり—

アリストテレスが $\kappa\omicron\iota\nu\omega\nu\iota\alpha$ (コイノニア、共同体あるいはコミュニティ) のなかでおこなわれている経済活動として説明している諸財の交換とマルクスがインテルムンディア (*intermundia*、マルクスはこのラテン語をドイツ語表記で *Intermundien* と記している) のもとでおこなわれていると想定した商品交換とのちがいをあきらかにして、いわゆる「価値論」の論理的内容および貨幣と「資本」の概念を理論的に再構成したいというのが、私の報告の課題である。もっとはっきりいえば、「価値論」を介在させないでマルクスの「資本」概念を論理的に構成できないか、ということである。なぜこのような課題設定を思いついたかという、その理由はかつて福田徳三の手がけたアリストテレス研究ならびにそこからかれの導き出した「共産原則」と「費用原則」との対比にもとづく理論展開がマルクスの「価値論」に対して根本的に批判的な意味をもつという確信をえたからである。福田がマルクスのアリストテレス解釈のまちがいを忌憚なく指摘したためであろうか、かれの提示した批判的視点はその後ほとんど顧みられることはなく、宇野弘蔵によるマルクス「価値論」の批判的再構成の試み ([1]) においてもまったく取り上げられることはなかった。宇野はマルクスの用語法に依拠しつつも独自の論理構成を提示して「価値論」を自己流に叙述してはいるが、商品交換が「共同体間」に発生して「資本」の原初的な成立にいたる過程についてはこれを十分に論述しているとはいえない。じつは、福田の視点を「資本」に関連したアリストテレスの概念整理にまでおぼすことにより、「資本」の概念にとって必要な商品交換の独自性があきらかになるのである。もとより、その種の交換、すなわち営利交換 ([2]参照) が成立することの説明をアリストテレスがおこなっているわけではない。かれが、とりわけ『ニコマコス倫理学』において「交換」の事例として取り上げているのはコイノニア内部の財交換のかたち(「共同体内分業」)であって、「共同体間分業」についてはおもに物々交換(バーター)が指摘されているばかりである。営利交換、したがって商品交換を理論的に説明するためには、19世紀になってリカードが案出したいわゆる「比較生産費」のロジック、あるいはそれをさらに抽象化したハロッドの「生産費比較」の理論がどうしても必要になってくる。

ところで、共同体内分業とか共同体間分業とかいう日本語表現に特有の歴史的・情緒的な煩わしさをできるかぎり回避するために、本報告ではコイノニアもインテルムンディアもそのままカタカナ日本語として使用することにする。両者は空間的には密接不可分に関連しているが、そこで展開されている諸経済行為のかたちには明瞭なちがいがある。この区別をひとまず念頭に置いたうえで、マルクスがかれのいう「価値形態」および「資本」の概念構成にあたって決定的な個所で引用を試みているアリストテレスの所論を検討し、そのうえでマルクスの想定したインテルムンディアにおける交換の独自性を一般的な「価格比較」の観点から掘り下げ、いわゆる「価値論」を経由せずに計算貨幣と商品貨幣という2種類の貨幣の区別ならびに、「資本」の概念、より正確に言えば、 $G-W-G'$ 図式でしめされる営利交換の概念に到達する、といった順序で議論を展開させてみたいとおもう。

II アリストテレスのコイノニア内交換論

(1) 問題の所在

周知のように、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の第5巻において、かれが家政術(オイコノミケー)と称しているものの立場からコイノニアのなかでの交換およびその例証を解説している。このばあい「術」はテクネーを意味している。ここでかれは交換を取材術または貨殖術(クレマティステイケー)の立場から論じているわけではないことに注意しておく。

ところで、かれがコイノニア内部の交換に共通の基準と見なしているのはクレイア($\chi\rho\epsilon\iota\alpha$, 需要量)であることに注目しておきたい。それはマルクス流の「労働量」ではない。このコイノニア内交換論についての解釈において逸することのできない論点を提示しているのは福田徳三である。かれはつぎのように論じている。

「単なる均等報酬の原則とアリストテレスの名くるもの、其れは即ち費用原則であり、所謂交換原則であつて、ア氏は明かに、其の比例的報酬の原則を、之れと対抗せしめてゐるのである。匡正の正義と配分の正義とを対立せしめ、前者は算術的比例に従ひ、後者は幾何的比例に従ふとし、流通の正義も亦た幾何的比例に従ふもののだとしてのは、更らに此の対抗を明瞭ならしめたものである。費用原則は、匡正の正義に属し、算術的比例に従ふ。共産原則は流通の正義に属し、幾何的比例に従ふ。」([4], 145 頁)

福田はこのようにアリストテレスの議論を正確に要約し、マルクスがアリストテレスの議論を誤解して「共産原則」を「費用原則」と取りちがえている、という正しい認識をしめしている。とりわけアリストテレスの例証をマルクスは曲解しているとする福田の指摘はきわめて重要である。

以下の議論でとくに問題となるのはアリストテレスのあげている二つの例証である。それをさらにいっそう広い視角から解釈しうる可能性を探求しようとおもう。

(2) アリストテレスのコイノニア内交換論

以下にあげるアリストテレスの仮説例はマルクスが「等価形態」を論じる際にとりあげられているものである。[なお、本文の引用は Loeb Library の対訳本と日本語訳を参照した([5])。]まず、その検討に移ろう。かれはこういう。

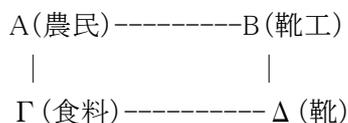
「貨幣($\nu\omicron\mu\iota\sigma\mu\alpha$)は、いわば、一つの規準として、物品を同じ規準で測られたものとし、平等なものにする。交換($\acute{\alpha}\lambda\lambda\alpha\gamma\eta$)がなければ、コイノニアはなかったであろうし、平等がなければ交換もなかったであろうし、一つの規準で測られることがなければ、平等もなかったであろうからである。事物のあるがままにしたがえば、これほど異なっている事物が一つの規準で測られるのは不可能であろう。ただ、需要量(クレイア)と関係づけられるとき、ひとはこれを納得できる範囲で規定しうる。そこで、なにか或る一つの、すなわち、あらかじめなされた取り決めによるものがなければならぬ。それが貨幣(ノミスマ、取り決め)とよばれるのはこのゆえである。貨幣はすべてのものを一つの規準で測られたものとする。なぜならば、すべてのものは貨幣によって測られるからである。」

そして、つぎのように例証する。

「A は家屋、B は 10 ムナ($\mu\nu\alpha$)、Γ [英訳では C] は寝台。いま家が 5 ムナに値するならば、つまり 5 ムナと等しいならば、A は B の 2 分の 1。また、寝台すなわち Γ は 10 分の 1 のばあい、幾台の寝台が 1 軒の家屋に等しいかは明かである。すなわち 5 台。」

さて、U を 1 軒の家屋、A を家屋への「需要量」(「労働量」に対応させる意味でギリシャ語のクレイアをこう訳しておく)、V を 5 台の寝台、B をそれだけの寝台への「需要量」としよう。このばあい、

U, A, V, B が後述するアリストテレスの4項関係の要素となる量であると解釈される。ところで、アリストテレスはいま一つの「交換」の事例をあげている。それは、A(農民)、B(靴工)、Γ(食料)そしてΔ(靴)の4つの項からなる「交換」である。図式化すれば、



という形になる。一般化していえば、ここにはA、B、ΓそしてΔの4項関係がしめされている。それがコイノニアを産出するのである。先の事例を同様の形に書き直せば、



となるであろう。この4項関係はどのように解釈できるだろうか。具体的な数値(自然数)をあてはめて第一の4項関係を説明しよう。Aを農民の単位当たり需要量(靴1単位)、Bを靴工の単位当たり需要量(食糧1単位)、Γを農民の単位当たり食料生産量、Δを靴工の単位当たり靴生産量(1足)というように記号法をさだめる。そのとき、たとえばA:Bを2:3とすれば、 $A:B = \Delta : \Gamma$ が成り立つというのはつぎの3つの関係が成立することにほかならない;

$$3A = 2B \text{ ならば } 3\Delta = 2\Gamma \cdots (i)$$

$$3A > 2B \text{ ならば } 3\Delta > 2\Gamma \cdots (ii)$$

$$3A < 2B \text{ ならば } 3\Delta < 2\Gamma \cdots (iii)$$

これらのうち、(i)式に収斂するような4項演算がコイノニアの「単純再生産」(コイノニア内部の閉じた社会的=計画的分業)をもたらすことになる。これは必要な変更をくわえて第二の4項関係にもあてはまる。ここにしめされているのは、バートランド・ラッセルが「相似性(similarity)」の「4項関係」(a relation of four terms)として特徴づけているものである([10])。それはコイノニア内部の分業関係に基づく交換、すなわち「応報の正義」にもとづく交換構造を表現している。したがって、その4項演算を商品交換における「価値形態」に結びつけて解釈したマルクスの議論はアリストテレスのいう「交換」の概念をとりちがえた謬論であろう。ここには交換利益も労働量による「価値」規定も介在してこないのである。それでは商品交換はどこでどのようにおこなわれ、営利交換にむすびつくのであろうか。

Ⅲ マルクスのインテルムンディアにおける交換

まず、インテルムンディアについてのマルクスの記述にふれておこう。かれは資本論のなかで「交換過程」を論じるさいに商品交換は「共同体と共同体の間隙(Intermundien)」でおこなわれるとのべている。そして、この叙述より前に「間隙」について明確にふれている。ドイツ語では、...in den Interumundien der alten Welt と記されている。日本語でいえば「古代世界の間隙において」と訳されよう。ここに出てくる Intermundien については「エピクロスの神々」にかんする注釈のなかで Zwischenräumen (間隙)と同義としてあつかわれている。1976年の英語版資本論ではこの箇所が...like the gods of Epicurus in the *intermundia* というように訳されている。羅和辞典では *intermundia* (インテルムンディア)の訳語として「世界間空間」と和訳されている。訳語はともかく、文脈から推してインテルムンディアが上述の「共同体と共同体の間隙」に相当することはあきらかである。また、このインテルムンディアに商品交換、さらには「資本」の展開する場をもとめたマルクスの指摘はそのかぎりで正しいようにおもわれる。問題はその先にある。というのは、そこでなぜ

商品交換がおこなわれるのか、さらに、本源的な「資本」がいかにしてそこに発生するのか、この問いにマルクスはまともに答えていないからである。じっさいに「価値形態」をいかに「展開」させようとも、「交換過程」の特徴をかれ特有の対辞(対語、a pair of words)によっていかに描こうとも、この問いへの答えは出てこないのである。むしろ、その手がかりをあたえているのはアリストテレスである。かれはこういつている([6]):

「商人術は財を作るもの、それも凡ゆる仕方によってではなくて、ただ財の交換によってのみ作るものである。そうしてこれは貨幣に関係あるものだと思われている。何故なら貨幣は交換の出発点であり、目的点であるからである。そしてさらに、この種の取財術から生ずる富には限りがないのである。」(下線は引用者による)

しかしながら、アリストテレスは「商人術」の成立する根拠までしめしているわけではない。すでに指摘したように、福田はマルクスがアリストテレスの「倫理学」を誤読しているとする主張をみずから、そのギリシャ語原文およびその解釈にかかわる研究史に検討をくわえることによって立証している。これはまさしくメタ経済学的方法態度といえる([3]参照)。かれはアリストテレスからマルクスを見て、いわゆる「価値自由」の立場からマルクスの議論の組み立て方に根本的な批判をくわえることができた。とくにアリストテレスが例証したのは、前述のように、「幾何的比例」にもとづく「共産原則」であって「代数的比例」にもとづく「費用原則」(＝労働価値説)に依拠するマルクスの議論とは根本的に異なっていると指摘はじつに鋭いマルクス批判となっている。しかしながら、福田の「費用原則」にも問題はあつた。かれは、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』においてとりあげた算術平均の説明をバーネットの説を紹介するかたちで展開している。それは裁判官の判決＝「正義」を計量する「費用原則」をしめすものとされている。いま、 Γ は $\kappa \epsilon \rho \delta \omicron \varsigma$ (利益)として評価した「不正」、 Δ は $\eta \mu \iota \alpha$ (損失)として評価した「加害」とすれば $(\Gamma + \Delta)/2$ が $\mu \iota \sigma \omicron \nu = \delta \iota \kappa \alpha \iota \omicron \nu$ (中間＝正義)に相当する。ここで、 $(\Gamma + \Delta)/2 = \Sigma$ とおけば $\Gamma - \Sigma = \Sigma - \Delta$ であるから、たしかに算術平均がなりたっている。しかし、この算術平均にもとづく「費用原則」からは営利の根幹となる損益計算が導かれることはない。なぜならば、 $\Gamma - \Delta$ 、つまり、純利益の観念がそこにあらわれてくることはないからである。したがって、また「費用比較」ないし「価格比較」による利益計算、その純粹型としてマルクスの創案した G-W-G という営利交換の範式の出現する可能性も出てこないのである。もとより、マルクスはマルクスで「価格比較」と営利交換との不可分のつながりを理解しておらず、その点ではリカードに劣っている。そこで、アリストテレスの記号法をそのままにして、純利益を導入し、G-W-Gをみちびくことにする。

いま、「商人術」の担い手である商人がインテルムンディアの 2 点 α と β において営利を実行するものとしよう。インテルムンディアの「点」は空間座標の定まった地点を連想させるが、正確には時空座標を想定しなくてはならない。というのは、論点を先取りするかたちでいえば、以下にしめされる命題は論理的には、たとえば異種通貨の交換にさいしておこなわれるスワップ取引や同一商品の掛売買にもあてはまるからである。仮設例によって、意味のある $\Gamma - \Delta$ の成立する可能性をしめそう。2種の財 A、B についてコインシア α と β のなかでつぎのようなかたちで交換(以下、 \rightarrow 印であらわす)がおこなわれているものとする:

コインシア	α		β
A	1	単位	1
B	X($\neq 1$)	単位	1

ここで、二つのケースがかんがえられる。

i) $X > 1$ のとき、 $X = 1 + Y$ (Y は正の有理数) をみたく Y がある。交換は①、②の経過をたどっておこなわれる:

① α で、 A の 1 単位 \rightarrow B の $(1 + Y)$ 単位 $\cdots \cdots B$ の「買い」

② β で、 B の $(1 + Y)$ 単位 \rightarrow A の $(1 + Y)$ 単位 $\cdots B$ の「売り」

ii) $0 < X < 1$ のとき、 $X + Y = 1$ (Y は正の有理数) をみたく Y がある。このとき、交換はつぎの③、④の経過をたどっておこなわれる:

③ β で、 A の $(1 - Y)$ 単位 \rightarrow B の $(1 - Y)$ 単位 $\cdots B$ の「買い」

④ α で、 B の $(1 - Y)$ 単位 \rightarrow A の 1 単位 $\cdots \cdots B$ の「売り」

ところで、ここで想定した商人の目的は「純利益」ないし「譲渡利潤」である。「譲渡利潤」がなぜ得られるかをあきらかにしたのはリカードであり、かれの「比較生産費」命題を単純化し形式化したのはハロッドである([7],[9])。周知のように、ハロッドはそれを国際経済学の「根本原理」として重視し、その著書の最初で詳しく解説している。上述の仮設例にしめされている交換利益発生仕組みははましくリカード・ハロッド流の、「費用比較」—もっと一般的に「価格比較」—による「譲渡利潤」形成のそれと論理的には同値である。いずれにせよ、仮設例にしめされた商人の交換行為によって、いわゆる商業利潤が生ずるのである。その典型的なケースは A が貨幣(商品貨幣)であるときであり、マルクス流の表記法にしたがえば、 $G - W - G'$ である。

IV 結論的な命題の提示

(1) アリストテレスはコイノニアにおける計画的分業と交換を 2 種の需要量と生産量との 4 項関係の構造にそくして解明し、そこにおける計算貨幣(ノミスマ)の機能をあきらかにした。

(2) マルクスは交換利益ないし営利交換のおこなわれる場をインテルムンディアとして正しく把握したが、営利交換のおこなわれる根拠をしめすことができなかった。また、いわゆる「価値論」の用語法をぬきにしても、上述のように営利交換の論理的な根拠、さらには商品貨幣の双対的規定を解明することは可能なのである。

参考文献(主なもののみ)

[1] 宇野弘蔵[1969]『資本論の経済学』(岩波書店)

[2] 神武庸四郎[2006]『経済史入門』(有斐閣)

[3] " [2016]「産業革命の構造」[改訂増補版](一橋大学附属 図書館 Hermes-ir)

[4] 福田徳三[1930]『厚生経済研究』(刀江書院)

[5] Aristotle[1926], *The Nicomachean Ethics*, translated by H. Rackham, Harvard U. P., Cambridge, Massachusetts. (加藤信朗訳「ニコマコス倫理学」『アリストテレス全集』13, 岩波書店, 1973 年)

[6] Aristotle [1932], *Politics*, translated by H. Rackham, Harvard U. P., Cambridge, Massachusetts. (山本光雄訳「政治学」『アリストテレス全集』15, 岩波書店, 1969 年)

[7] Harrod, R.[1933], *The International Economics*, Cambridge.

[8] Marx, K.[1968] *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag Berlin.

[9] Ricardo, D.[1951], 'On the Principles of Political Economy and Taxation' in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Cambridge U.P.

[10] Russell B.[1919], *Introduction to Mathematical Philosophy*, George Allen & Unwin, London.